

## 田山花袋「鉢形城詩」小考

關 清 孝

### はじめに

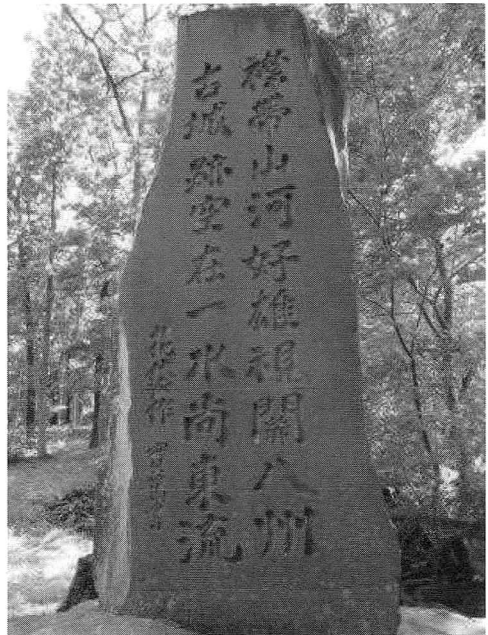
鉢形城は埼玉縣大里郡寄居町に残る中世に築かれた城郭である。荒川南岸の崖上に築かれ、土壘や堀などの遺構がよく保存されているため、一九三二年に國指定史跡となった。近年では、三の曲輪の土壘や堀・門などが整備復元され、日本百名城にも選定された。戦國時代には後北條氏の北關東領有の據點であり、豊臣秀吉の小田原攻の際には北條氏邦が立てこもった。城兵三千に對して、豊臣方の本多忠勝・上杉景勝・前田利家・眞田昌幸らが五萬の軍勢によつて攻撃し、落城せしめたといふ<sup>1)</sup>。その後は遺棄され、再び城郭が築かれることはなかった。

その本曲輪跡には現在、臺座を含めると高さ三メートルほどの石碑がたてられている。石碑には、漢字二十文字からなる田山花袋の「詩」が刻されている(圖一)。田山花袋は、明治から大正にかけて活躍した小説家である。石碑の文字は武者小路實篤の揮毫による。石碑の裏面には、「昭和二十九年八月五日」の日附とともに「田山花袋翁は曾て此地に遊んで诗情豊かな一篇を残した。今や此の詩は新しき村を本縣に營んで理想郷を作りつゝある武者小路實篤先生の

麗筆によつて永遠に生きることゝなつた。山紫水明の自然は翁と先生の藝術を通して一入の美しさを増した」と撰文が刻されている。寄居町立鉢形城歴史資料館の案内では、「自然主義文學の文豪田山花袋が大正七年に鉢形城跡を訪れた際に詠んだ漢詩を刻んだもの」とされている。

田山花袋は明治四年（一八七一年）生まれ、武者小路實篤は明治十八年生まれ、ともに小説家として著名な人物である。明治から大正に活躍した作家は大抵漢學の素養を有しており、石碑に刻まれた詩の作者である田山花袋も例外ではなかつた。中島清氏の研究によると、花袋は十三歳より漢詩作法の指導を受け、未發表のものも含めると生涯で三千首にものぼる漢詩を作成したという。しかし、花袋の漢詩に對しては、從來の研究では、小説や紀行文以外の作品として紹介するにとどまつており、現代語譯や書き下し文もほとんど示されていない。

田山花袋の四年前（一八六七年）に生まれた夏目漱石は、二百首をこえる漢詩を残した。漱石の漢詩については、研究成果も多く、多様な読みもおこなわれている。しかし、明治大正期に書かれた漢詩の中で、漱石のものほど多く讀まれたものはない。漱石の漢詩は特殊な存在ということが出来る。それに對して夏目漱石と同時代を生き、漢詩を數多く書きのこした他の人物については、研究がすすんでいるとは言いがたい。



圖一

そこで、本稿では、鉢形城址の石碑に刻まれた詩を考察することによって、明治から大正期に活躍した田山花袋が、「漢詩」という表現方法をどのように用いていたのかを推測したい。そして、それを考えることは、近代の日本人が「漢詩」というものをどのように受け入れていたかを考える一助になるのではないかと期待しているからでもある。

さて、鉢形城址の石碑に刻まれた「詩」は、字句を変えず五度にわたり著作や雑誌記事中に掲載されている。収録文章により詩題がかわるため、本稿では「鉢形城詩」と統一して呼ぶこととする。はじめに小論で取りあげる田山花袋「鉢形城詩」の全文を示したい。

襟帶山河好 襟帶の山河好し

雄視關八州 雄視す關八州

古城跡空在 古城の跡空しく在り

一水尙東流 一水尙ほ東流す

とりまく山や川はすばらしく、關東平野を壓倒している。

城の跡はむなしく残っており、ひとすじの川は東へ流れていく。

## 一 田山花袋と漢詩

はじめに、田山花袋と漢詩について、そして「鉢形城詩」がどのように発表されたのか、その過程について確認しておきたい。

田山花袋は、明治四年（一八七一年）に館林藩士の次男として生まれた。没年は昭和五年（一九三〇年）。藩儒であっ

た吉田陋軒や兄の田山實彌登から漢詩を學ぶ。青年時代は雜誌に漢詩を投稿し、作家として『蒲團』や羽生を舞臺にした『田舎教師』などの小説で名を成すのと前後して、紀行文の中で百を超える漢詩を發表した。晩年には、私的に漢詩を綴りつづけ、その數は二千三百首にものぼる。

田山花袋の漢詩の時期区分については、中島清「花袋の漢詩」が三期に分けている。第一期は雜誌『穎才新誌』に投稿していた、明治十八年（一八八五年、花袋十五歲）から明治二十四年（一八九一年、二十一歲）までの六年間。『穎才新誌』に掲載された花袋の詩（百八十五首）や、彼の稿本で確認することができる。第二期は大正三年（一九一四年、四十四歲）からはじまる、著作や新聞・雜誌で漢詩を通じて發表した期間。第三期は、最晩年大正十五年（一九二六年、五十六歲）から没年までの五年間。日記的に書き残した膨大な作品群である。

この時期区分を、作者の側からでなく、誰に讀まれたかという觀點から見直すこともできよう。第一期は、『穎才新誌』に作品を投稿していた時期である。齋藤希史「作文する少年たち」によると、『穎才新誌』は、全國の學校から投稿された子どもたちの文章を掲載した雜誌である。そして、投稿に関しては學校が大きな役割を果たしたという。學校での作詩、學友とのやりとり、教員の添削、このような過程を経て、學校の名によって作文や詩が投稿されたという。

『穎才新誌』という雜誌の性格から考えれば、第一期の作品は、學校という空間の中で學友や教員、さらには兄の實彌登とのやり取りの中で作られた詩である。いわば内なる空間において作成されたものであるといえよう。そうであるなら、この中で作詩者にとつての讀者は、雜誌『穎才新誌』の讀者ではなく、投稿する前段階の教員や學友などの身近な人々が第一の讀者とすることができる。花袋は、六年間で百八十五首もの漢詩が掲載された。ここからも積極的に作詩し、ほこらしげに周圍に見せる少年の姿が想像できる。これに對して、第二期の詩は、出版社から世に刊行された紀行文を通じて、外の世界に向けて發せられたものである。小説と同じように、不特定多數の外の世界の人々が讀者となつ

たのである。この後の第三期に入ると、日記のように日々感じたことを備忘録のように漢詩を綴るようになる。公表せずに書き溜めていたことを踏まえれば、花袋の漢詩は再び讀者を内なる世界へ戻したと考えることができる。誰に讀まれたかという觀點で花袋の漢詩群をとらえると、第二期が彼にとつて特殊な時期であつたことが認められる。

本稿であつかう「鉢形城詩」は、中島清氏のいう第二期に當たり、紀行文で發表されたものである。紀行文中ではあるが、自らの漢詩が廣く讀まれる機會を得たのである。そこには彼の漢詩に對する考え方が反映されやすいと考えられる。紀行文と漢詩との關係については、宮内俊介「初期田山花袋論——紀行文と小説との谷間——」<sup>6</sup>に、漢詩の作成が紀行文の作成につながつたとの指摘がある。明治二十三年一年間に『穎才新誌』に投稿、發表された漢詩四十六詩の内、ほとんどが「途上所見」「江上夜歸」「溪村早行」「足尾途上」という旅に於ける風景・人事の矚目をその内容としていふことを踏まえ、多くの紀行文を残した理由として、「花袋の初期の作品が旅に於ける漢詩であつた」ことを指摘する。また、花袋の漢詩について、丸山幸子「資料 花袋の漢詩」<sup>7</sup>は、著作の中から漢詩六十五首を抽出紹介した後で、次のように記している。

漢詩がその著作に散見するようになったのは、大正五年の紀行文「東京の近郊」からである。その後晩年に至るまで、紀行文の中で大きな位置を占めるようになっていく。

紀行文で漢詩を發表するようになり、それが「文壇に擡頭していくとともに發表の途絶えていた漢詩が、晩年に至つて花袋の重要な表現手段になつていた」とまとめる。いずれも漢詩と紀行文とが深いつながりがあつたことを述べている。ここまでを一度まとめしておく。學友たちと漢詩を作り、雑誌に投稿していた田山花袋は、その掲載數から自らの作詩

の才能に自負を抱いていたはずである。それが、作家として活躍するようになる、紀行文の作成にも應用されるようになり、同時に紀行文の中でも漢詩を發表するようになった。そして、それは花袋が外の世界を意識して作られた漢詩であった。

さて、本稿で問題にしている、「鉢形城詩」も秩父地方への紀行の中で作られたようである。この詩がいつ頃作られたかは定かではないが、全集に収録されている「年譜」によると、「大正三年」に「四月十一日、太田玉茗と秩父に遊ぶ」とあり、また、「大正七年」には「四月 八日、先藏・瑞穂を連れて秩父へ。小川泊。九日、長瀨泊。十日歸京。」とある。先藏・瑞穂ともに花袋の子ともである。「大正三年」に秩父を訪れた際は、鉢形城に足を運んだか否かは不明である。しかし、「大正七年」の子ども二人を連れ旅行で、四月九日に小川から長瀨への行程の途上にある鉢形城に立ち寄ったことが想像される。それと同時に、大正六年までには鉢形城を訪れていた可能性もある。大正六年の紀行文「秩父の諸勝」では、東京から秩父への行程を紹介する文に次のような記述がある。

そこに行くには。信越線の熊谷驛で上武線に乗替へる。先づ熊谷を出る。武川驛あたりでは、荒川の鮎が取れる。段々關東平野から、秩父の山の中に入つて行くやうな地形で、兩神山などが高く前に仰がれて氣持が好い。寄居町もちよつと變つてゐて面白い。川に向ふには、歴史で有名な鉢形城址がある。一汽車おくらせて、それを探つて見るのも好い。波久禮驛あたりから、荒川の谷が段々見え出して来る。

秩父への行程の中で「鉢形城址」の文字が見え、このときまでに鉢形城に足を運んでいたと推測することもできる。この文の扱い方は難しいが、「年譜」の範囲内、大正三年から七年の間に訪れたと考えられる。

「鉢形城詩」の初出は、管見の限りでは大正七年の紀行文『山行水行』<sup>(1)</sup>である。また、「鉢形城詩」は三つの紀行文に挿入されている。それらを時代順に見ていきたい。

『山行水行』は、大正七年七月に刊行された。時期としては、前述の「年譜」に見られる大正七年四月の子ども二人との秩父旅行の直後である。「鉢形城詩」は、『山行水行』で、戦国時代に上杉謙信と北條氏が關東で攻防を繰り返していたことを説明する文の中に出てくる。「荒川右岸の鉢形の城が、いかに北條方のために有効に働いてゐたかといふことが想像された。」という文の後に、次の通り記している。

そのの古城址には、今でもその城のさま、本丸、三の丸、姫曲輪などのあつたさまが、それと明かに指さされた。半ば桑畑で、半ば林であるが、そのところどころを淡竹の藪が縫つた。古壘の上へのぼると、荒川の屈曲して流れ落ちて来るさまが一目に見えて、人をして「襟帶山河好、雄視關八州、古城跡空在、一水尙東流」の感に堪へざらしむるものがあつた。

謙信が平井城に據らずして廢橋にその根據を置いたさまも、英雄の眼識の低くないのを思はせた。

はじめに草木に覆われた鉢形城址の様子を描寫し、その際の情懷として「鉢形城詩」を記している。淡々とした筆で客觀的に情景が書かれている。前後の文章は、上杉謙信が北條方の鉢形城に近い平井城ではなく、現在の前橋である廢橋に關東進出の本據を置いたことを敘述している。そのことをふまえると、旅で訪れる土地の歴史的背景を説明する中で、史跡の現状に對する述懐を記す文章であるということができよう。

「鉢形城詩」は、この二年後の大正九年四月に發表された「秩父の山裾」<sup>(1)</sup>に、あらためて収録される。しかし、その

文章の書かれ方は『山行水行』と異なる。「年譜」に見られる「大正七年」の行程と同じように、小川から乗合馬車で寄居へ行き、寄居から汽車に乗り長瀨へ到着する紀行文である。寄居へ向かう馬車の中から、「かねてより行つてみたい」鉢形城への思いが綴られ、やつこのことで城址へたどり着いた直後、次のような文が續く。

何とも言へない雄大なシインがそこに開けた。荒川は大きな溪谷をつくつて、兩山の間を激怒憤越して流れ落ちて來てゐるのである。そしてこの鉢形の城址のある、その當時は立派な天嶮として役立つた數百仞の一面の絶壁に當たつて、大きく東北に孤線を描いて、そして關東平野へと流れ出でてゐたのである。長瀨の溪潭が好いとか、三峰に至る間の山水が好いとか言つたとて、何うしてこれとは比較にならうと思はれるほどそれほどその眺めはすぐれてゐた。私は敢て言ふ、東京附近で、これほど雄大な眺めを持つた峽谷は他にはない、と。

『襟帶山河好、雄視關八州、古城跡空在、一水尙東流』かうした詩が、ひとり手に私の頭に上つて來た。

私は一時間以上もそこに彷徨した。感慨盡きるところを知らなかつた。

『山行水行』での客觀的な描寫と異なり、城址と周邊の様子が情緒的な表現で綴られてゐる。特に城址の足下を流れる荒川の描寫は、雄大な眺めを讀者に想像させる。この描寫があるため、詩の結句「一水尙東流」は、讀後にスケールの大きな餘韻が感じられる。『山行水行』で作者の思うところを述べる役割であつた「鉢形城詩」は、「秩父の山裾」では讀者に壮大な風景を喚起させる働きに變化したのである。

さらに、その五ヶ月後の大正九年九月に發表された「秩父の山に沿ひて」になると、地の文章と詩との關わり方も變化する。はじめに「鉢形城詩」を含む漢詩を五首擧げ、その後紀行文が書かれるのである。「鉢形城詩」に關わる文



は以下の通りである。

その城址のあるところは、単に風景として非常にすぐれてゐた。鉢形の村から入つて行くと、搦手橋の下の清浅な溪流の繪のやうなのが既に私の心を惹いた。懐古の情と山水を愛する心とは雜り合つて私の興を動かした。

それに、荒川の折れて大きく曲つてゐるさまが何とも言はれなかつた。實際、襟帶山河好といふ氣がした。それに、その時分の城跡が依然として残つてゐて、城壘、殘濠すべて一々指點された。石垣の僅かに残つてゐる處では、私は堪らなくなつて、それを撫でゝ見た。

半ば桑畑半ば麥畠になつてゐる中に、農夫が春の日を帯びて耕してゐるのも『詩』であれば、その小高いところに、その頃からの榎の大きな樹の一本残つて立つてゐるのも『詩』であつた。私は感慨無量たらざるを得なかつた。城壘のあつた跡には、疎らな林があつて、それをわけて入ると、一目に荒川の大河が見えた。『一水尙東流』それは實際にさう私は感じた。

紀行文の文章は、「鉢形城詩」を解説するためのものになつてゐるのが見てとれよう。はじめに鉢形城址の風景を説明しながら、景色の良さとともに「懐古の情」が起きたことにふれる。そして、直後の荒川の様子から起句を引用する。さらに古城のありさまを描寫し、往時を感じさせない長閑な光景を『詩』と評し、結句を擧げて文を終えている。詩を作る際に作者が目にした光景や、その時の心情の吐露が詩の語順に従い書かれており、いわば「鉢形城詩」の通釋の役割を擔つてゐるのである。

紀行文の中に登場する「鉢形城詩」は、以上の三例であるが、年代が下るとともに情景の描寫が敘情性を強めていき、

最後には詩が紀行文の中から獨立する。紀行文の添え物であった漢詩が、漢詩の解説を紀行文に委ねるようになったのである。

そして、「鉢形城詩」が「詩」として完全に獨立したのが、「秩父の山に沿ひて」の二年後の大正十一年の「現代藝術家餘技集」<sup>(8)</sup>である。「現代藝術家餘技集」は、雑誌『中央公論』に掲載された特集欄である。平福百穂・芥川龍之介・安田鞠彦・谷崎潤一郎・久保田萬太郎・小杉未醒・久米正雄、そして、田山花袋の八人が自分たちの専門以外の藝術作品を寄稿する企畫である。當代活躍する畫家および作家という「現代藝術家」が本業のかたわらに作った、和歌、俳句、漢詩といった「餘技」を寄稿する。たとえば、芥川龍之介は俳句三十首、和歌十六首、そして畫贊を寄稿している。この特集に田山花袋は、和歌五十首、漢詩二十六首を寄せている。寄稿した漢詩は、『穎才新誌』に掲載された作品が中心であるが、その中に「鉢形城詩」を「鉢形懷古」と題して入れているのである。この中では、和歌と漢詩の本文が併記されているだけであり、解説などの文章は見られない。しかし、これは「鉢形城詩」が、紀行文の一部分ではなく詩として完全に獨立したことを意味する。

それと同時に、「現代藝術家餘技集」所收の漢詩から、花袋の「鉢形城詩」に對する思いが察せられる。花袋が寄せた漢詩二十六首中、それまでに紀行文に掲載された漢詩は六首あるが、複数の紀行文で掲載された詩は、この「鉢形城詩」以外はない。この時すでに五十二歳となっていた花袋にとって、「現代藝術家餘技集」は自己の詩文を振り返る機会であったとも考えられる。そこに、三度にわたって紀行文に掲載した詩をふたたび収録するところからも、花袋の「鉢形城詩」に對する愛着が想像できる。

さらに、中島清「花袋の漢詩④―花袋晩年の漢詩稿―」<sup>(9)</sup>によると、花袋は晩年に自らの漢詩集を編纂していたようである。群馬縣館林市の田山花袋記念文學館に自筆の稿本が残っている。稿本を書きはじめたのは大正十五年。全十七卷

構成で、二三一首を収録した大部なものであるが、その巻一に「鉢形城詩」が見える。「經越生鉢形至鬼石途上得六絶句 その三 鉢形」と改題し採録する。

このように「鉢形城詩」は、もともと紀行文を飾る一部分であつたが、紀行文が敘情性を帯びてくるとともに紀行文の中から、詩として獨立していった。そして、このような過程を経ながら、花袋の中では、その存在價值が大きくなっていったのではないだろうか。「鉢形城詩」に對する扱いを見ていくと、花袋がこの詩に深い思い入れがあつたと感ぜられる。花袋が自己の代表作の一つという位置づけをしていたといつても過言ではないだろう。

## 二 「鉢形城詩」の構造と中國古典詩

年少期から漢詩を作成していた花袋であつたが、この「鉢形城詩」には特に愛着があつたと思われる。本章では、その「鉢形城詩」を作成に關連したと考えられる漢詩と比較しながら検討していきたい。

花袋以前にも鉢形城は詩によまれている。花袋「鉢形城詩」の約五百年前、萬里集九の漢詩文集『梅花無盡藏』卷三上にその詩は見える。集九は、室町時代中期の禪僧で、彼の文名を聞いた太田道灌に招かれて關東に下向。騷亂の中、各所に行き、多くの漢詩を残した。それをまとめたものが『梅花無盡藏』である。長享二年（一四二八年）九月二十七日に、鉢形から上野國、今の群馬縣の角淵（平井城）に向かう際に作った七言絶句に、鉢形城がよまれている。書き下し文と現代語譯は、市木武雄編『梅花無盡藏注釋』<sup>15)</sup>にもとづく。

1 鉢形城壁鳥難窺 鉢形の城壁は、鳥も窺ひ難し

2 地軸擎來萬仞欹 地軸擎げ來たりて、萬仞欹つ

3 三四渡河臨上野 三、四、渡河して上野に臨めば

4 民蘆太半棘爲籬 民蘆、太半は棘を籬と爲す

鉢形の城の城壁は堅固で空を自由に飛ぶ鳥でも、そのすきを窺うこのとできぬほどである。

その地形は大地を支える地軸がさざげ持つように何萬尺も高くそば立っている。

そこから、三、四回、川を渡つて上野國に入ると、

庶民の家の大半はいばらを垣根としていた。

花袋の「鉢形城詩」とは異なり、鉢形城が城郭としての役割を擔っていた時によまれた詩である。城の様子は、鳥も越えることが難しいほど高く堅牢な城壁を持つ堂々たる姿を思わせる。それに對して、鉢形城から川を渡り北上した庶民の家は、いばらを垣根とした粗末なものとして描かれている。鳥が越えるのも難しいほどの高い壁を持つ城郭と、いばらで作られた民家の粗末な生け垣が比較された詩である。

集九の詩では、鉢形城の堅牢な城壁を表現する際に、素朴な民家の生け垣を比較對象として用いる。いばらを垣根にする粗末な「民蘆」をよみこむことにより、「鉢形城壁」の堅牢さを際立たせているのである。この詩では、一・二句によまれた「鉢形城壁」と三・四句の「民蘆」が對比される。そのため、對比という點に注目して、田山花袋「鉢形城詩」を見てみたい。

1 襟帶山河好 襟帶の山河好し

2 雄視關八州 雄視す關八州

3 古城跡空在 古城の跡空しく在り

4 一水尙東流 一水尙ほ東流す

萬里集九の「鉢形城壁」に當たるものは、三句目の「古城の跡」である。そして、これに對比されるものは一句目「山河」と四句目の「一水」である。關東平野を壓倒する周圍の山河や東へ流れ続ける一條の荒川と、先人が築いた古城の跡との對比が、花袋「鉢形城詩」ではなされている。萬里集九の「鉢形城」での對比は、ともに人工の建築物であり、城壁の高さと民家の垣根の粗末さが對比されていた。それが、花袋「鉢形城詩」では、雄大な自然と人工物の對比へと變化している。

ところで、中國古典の世界の中で「川」、流れゆく水に對してどのようなイメージを持っていたのであろうか。『論語』子罕篇に次のような一節がある。

子 川の上に在りて曰く、逝く者は斯くの如きか、晝夜を舍かず。<sup>16</sup>

(孔子が川の近くで言った、「老いてゆくことは、川のようなものだ。晝夜もとどまることがない」と。)

孔子が「川」に人間の「老い」をなぞらえ嘆きの言葉を述べる。この『論語』の一節は、一般的に流れゆく水が推移する時間のイメージと重なり、流れる時とともに老いゆくことへの嘆きを述べたものと解釋している。いったん流れ去った水はふたたび戻ることはない。この川の特質は、時間の性質と重なる。そのため「川」は時間の變化をイメージさせる言葉として用いられるのである。そして、中國の傳統的な詩においても、時間の推移を表すために、この川のイメージが用いられる。

花袋の「鉢形城詩」でも、中國の傳統的な「川」のイメージが用いられていると考えてよいであろう。往時は多くの兵が集っていたであろう城の跡、そして、その時代から變わらずに存在する周圍の山河、それと同時に時代の推移を讀者に喚起させる一條の川、そこには單なる人工物と自然の對比ではなく、時代とともに變化する人工物と變わらない自然の對比と見ることが出来る。しかしながら、この詩においては、時間の推移を想起させることだけでなく、別の點にも注目すべきであろう。それは、川のほとりに立ち嘆いた孔子がごとく、「古城の跡」に立ち、東流する「一水」を眺める詩人の姿や心情を讀者に暗示させるという點である。古の城跡と東流する川、それを眺める詩人は、眼前の風景によつて搖り動かされた心の感慨を詩に綴るのである。對比という視點から考えると、花袋の「鉢形城詩」は、人工物と自然の對比、さらには、それらの景色とそれを見る人間の對比、いわば二重の對比がなされているのである。

萬里集九の漢詩が、堅牢な城壁と粗末な民家の垣根という對比だけであつたのに對して、花袋の「鉢形城詩」は二重に對比をおこなっている。これが、二つの詩の構造における大きな違いである。しかし、對比の二重性についてはとくに目新しいものではない。花袋の「鉢形城詩」を目にして、われわれが想起するのは杜甫「春望」の首聯であろう。

國破山河在 國破れて山河在り

城春草木深 城春にして草木深し

人口に膾炙した句であるので、あらためて述べる必要はないが、「國」や「城」といった人間の營みと「山河」・「草木」などの自然が對比されている。この對比は、變化する人間の營みと變わらない自然との對比である。そして、直接表現はされていないものの、この景色を見つめる詩人の心情、具體的には荒廢した國に對する感慨を讀者に想像させるので

ある。つまり、風景と人との對比もなされているのである。この二つの對比は「鉢形城詩」と同じ構造になっていることは言うまでもない。むしろ、花袋が荒川と周囲の山々の中にある鉢形城の跡を見て、杜甫「春望」を想起し典據として用いた、もしくは模倣したと考えるのが妥當であろう。

田山花袋は『美文作法』<sup>15)</sup>で、唐代の詩について次のように評している。

李白、杜甫は今更此處に論ずるまでもない。其氣魄の大なる、感慨の悲痛なる、千年萬年の後までも活きている詩であらうと思はれる。其他孟浩然、岑參、韋應物、錢起、王維等讀むべき詩は非常に多い。

花袋は「美文」が書けるようになるために、學ぶべき作品として唐代の詩をあげ、なかでも李白・杜甫の作品を高く評價している。彼自身も少年時代には當然唐詩を學び、雜誌に投稿する漢詩を作成する際には、唐詩を手本としていたであろう。目の前に廣がる景色を漢詩によりこもるとしたおりに、杜甫「春望」に着想を得、構成や詩語を借りても不思議はない。

この二重構造は、杜甫「春望」に限ったことではない。中國古典詩の世界では、高い建物に登り周圍を俯瞰する「登覽」や史跡から揺り起こされた情をつづる「懷古」といったテーマが古くから成立しており、似た發想の詩は枚擧げにいとまがない。事實、花袋自身も「鉢形城詩」を「現代藝術家餘技集」に収録する際には「鉢形懷古」と題している。

風景と人工物の對比、そしてそれを見つめる詩人という構造は、日本人にも愛されている唐詩の中からも數多く見ることが出来る。「鉢形城詩」作成に關連性が高い作品を以下にいくつか列擧する。李白の作品では、「黃鶴樓送孟浩然之廣陵（黃鶴樓にて孟浩然の廣陵に之くを送る）」があげられよう。

故人西辭黃鶴樓  
故人西のかた黃鶴樓を辭し

煙花三月下揚州  
煙花三月揚州に下る

孤帆遠影碧空盡  
孤帆の遠影碧空に盡き

唯見長江天際流  
唯だ見る長江の天際に流るるを

長江を見つめる詩人の心は故人に向けられているものの、雄大な自然と小さな孤帆の對比、そしてそれを眺める詩人という構造は花袋「鉢形城詩」と同じである。特に三・四句の流れを見つめる詩人のまなざしは影響を感じさせる。「登金陵鳳凰臺（金陵の鳳凰臺に登る）」においても、同様の構造が確認できる。

1 鳳凰臺上鳳凰遊 鳳凰臺上鳳凰遊び

2 鳳去臺空江自流 鳳去り臺空しくして江自ら流る

3 吳宮花草埋幽徑 吳宮の花草は幽徑に埋もれ

4 晉代衣冠成古丘 晉代の衣冠は古丘と成る

5 三山半落晴天外 三山半ば落つ晴天の外

6 二水中分白鷺洲 二水中分す白鷺洲<sup>(18)</sup>

7 總爲浮雲能蔽日 總べて浮雲の能く日を蔽ふが爲に

8 長安不見使人愁 長安見へず人をして愁へしむ



二句目の、古の臺が空しく残り、そこに變わらぬ長江が流れるという表現は、字句においても大きな影響を與えていると考えられる。また、高い樓閣から川を眺める詩と言えば、王之渙「登鶴雀樓（鶴雀樓に登る）」を外すわけにはいかない。

白日依山盡　　白日山に依りて盡き、

黃河入海流　　黃河海に入りて流る。

欲窮千里目　　千里の目を窮めんと欲し、

更上一層樓　　更に上る一層の樓。

海に向かつて東流する黃河を鶴雀樓から見つめる姿は、「鉢形城詩」と共通點を見いだすことができる。

明治時代に日本人が讀んでいたであろう唐詩からは、他にも多くの詩を見つけることができる。しかし、それは當然のことといえる。先に述べたように、この構造を持った表現様式は、中國古典詩の世界で數多く見られるからである。言い方を變えれば、定型化したテーマの一つである。花袋は「鉢形城詩」を作るのに、中國古典詩の世界を借りてきて、目の前の風景を表現した、ということにすぎないのである。中國古典詩の過去に思いをはせるといふ主題を、川を眺めるといふ様式を用いて表現すること、これに倣って花袋は詩を作った。そのため、前時代の萬里集九の對比構造と異なつたのである。<sup>(19)</sup>

これは花袋一人に限られることではない。當時の日本においては、中國古典詩を表現のよりどころとして作詩をすることは、特別ではなかった。佐藤正光「日本漢詩研究概論<sup>(20)</sup>」は、明治以降の漢詩について、正岡子規と夏目漱石とが、

漢詩をやりとりしていたことに觸れ、その中で、正岡子規「嚴島」の「終わりの二句は盛唐の詩人杜甫の「春望」詩を典據としている」と指摘している。正岡子規「嚴島」の終わりの二句は以下の通りである。

城塞皆已非　　城塞皆已に非きも

山高海長流　　山は高く海は長へに流る

「城塞」が時代によって無くなってしまったことと、「山」や「海」が依然としてそこにあることの對比、そして、それを眺める詩人の心情を暗示させる。これは花袋「鉢形城詩」と同じ構造が見てとれる。田山花袋と同時代の正岡子規も唐詩に着想を得て作詩をしていたのであり、このようなことは、當時は普通に行われていたものと考えられることができる。以上のように見えてくると、漢詩の素養がある花袋は、旅で訪れた目の前にある日本の風景を詩で表現する際に、中國古典詩の典型的な表現様式を用いた、そして、それは當時は一般的なことであつたということができよう。

### 三 「鉢形城詩」の形式上問題

もう一度、「鉢形城詩」の本文を、平仄の印をつけて示したい。○印が平聲を、●印が仄聲をあらわす。また、◎印も平聲であるが、同時に韻を踏んでいることもあらわしている。

〔起〕	襟	帶	山	河	好	襟帶の山河好し
〔承〕	雄	視	關	八	州	雄視す關八州
〔轉〕	古	城	跡	空	在	古城の跡空しく在り
〔結〕	一	水	尙	東	流	一水尙ほ東流す

右で示した平仄を、押韻・二四不同・反法・粘法という近體詩のきまりから見てみたい。「押韻」については、◎印の附いた偶數句末の「州」と「流」が下平聲の尤韻で押韻している。次に平仄の排列法をそれぞれ見ていきたい。

各句の二字目と四字目の平仄を違える「二四不同」については、起句と結句は守られている。しかし、承句では二字目と四字目とがともに仄聲になっており、轉句でも二字目と四字目が平聲になっている。「反法」は、起句と承句の對應する二字目と四字目の平仄を違え、轉句と結句の二・四字目も同様に違える規則である。「鉢形城詩」では、起句と承句の二文字目とともに仄聲となっている。また轉句と結句の四文字目とともに平聲であり、守られていない。「粘法」は、承句と轉句の二・四字目の平仄を同じくするきまりである。しかし、二・四字目とも平仄が異なっている。このように平仄の排列法で破格が見られる。

この「詩」は、一句が五文字であり、四句構成で書かれている。しかも、偶數句末が下平聲の尤韻で押韻している。そのため、「鉢形城詩」は一見すると五言絶句のように見えるが、「二四不同」・「反法」・「粘法」の規則が守られていない。つまり、押韻以外の形式は守られていないのである。

近體詩の規則に當てはめて考えれば、花袋の「鉢形城詩」は、「漢詩」と呼ぶはできない。しかし、花袋はこれを紀行文の中で、明治時代は漢詩を表す言葉であった「詩」を用いて發表し、「現代藝術家餘技集」では「漢詩二十六首」

の中に収録している。さらには晩年に自身の漢詩集を編纂する際にも、巻一に「鉢形城詩」を収めているのである。つまり、花袋は「鉢形城詩」を漢詩と認識していたのである。

花袋は、幼い頃より漢詩を學んでおり、平仄などの近體詩の規定を當然知っていたはずである。『穎才新誌』に投稿されたものは、もちろん平仄が守られている。詩作で平仄に苦心したであろうことは、田山花袋文學館所藏の「城山記」からうかがえる。「城山記」は、『穎才新誌』投稿のために書かれた漢詩、いわば下書きともいえる習作二百首を升目に入った用紙につづり、表紙と序文をつけたものである。中には兄實彌登の批正と思わせる朱が加筆され、最後には「明治二十一年四月」の日附が入っている。明治二十一年、田山花袋は十七歳である。

「城山記」には二百首が記されているが、そのうちの二十二首は文字がすべて埋まっておらず、未完成になっている。未完成のものは、次のようなものである。「田園雜興」と題された七言絶句であるが、□は原稿で空欄になっていることをあらわす。また、「城山記」は題と本文のみの記載であるが、平仄の關係をわかりやすくするため、二・四・六字目に平聲に○印、仄聲に●印を、押韻には◎印を附した。

江	村○
船	竿●
掉	歸○
潮◎	
東	北●
西	南○
晚	更●
鶯◎	
只	有●
□	□
□	□
□	□
事	
芦	花○
深	處●
弄	輕○
橈◎	

三句目の四文字目と六文字目の平仄を踏まえて、用字に苦心している様子が見えがえる。平仄を守りながらも文脈に

あう文字を選ばなくてはならないことに苦心していたからこそ未完成となつていたのであろう。このような未完成の漢詩が全體の一割ほど見られるのである。近體詩のきまりを厳しく教えられ、それを遵守して詩作を行つていたのであれば、どうして平仄が守られていないものを「漢詩」としたのであるうか。

田山花袋の漢詩の音律や漢詩の表現に對する考え方について、自身がそれを主題的に述べた文章は存在しない。しかし、文章表現に關する文章を取り上げながら考えてみたい。「鉢形城詩」がはじめて掲載された紀行文『山行水行』が出版される前年の大正六年に刊行された『趣味の紀行文』には、「紀行文のつくり方」という文が收められている。そこには次のような文章が見られる。

地理的知識のみに重きを置き、産業、地形交通などの人文地理でなければ『紀行文』ではないように思つてゐる人達にも私は與みしない。人文地理も大切であると共に、その自然の持つた『詩』も大切である。

それでは「詩」とは何か。直後に「地理は飽までも科學である。研究である。『詩』は抒情である。氣分である。飽までも作者の内部の發露である」とあり、形式ではなく作者の内部の發露の役割を持つ文章を意味しているようである。しかし、ここでの『詩』は形式の整つた所謂詩と無關係ではない。『趣味の紀行文』においては、二十二篇の紀行文の作品例を出し批評を加えている。その中の一つで徳富蘇峰の「長江遡流」をあげている。「長江遡流」は長江を舟で遡る紀行文であるが、行程や場所にまつわる故事を漢文訓讀調で綴り、江上からの情景を蘇峰自身の漢詩で表現している。この紀行文に對して花袋は次のような評語を添える。

氏の多い文中には、同じ紀行文でも、これよりすぐれたものは非常に多い。しかし、これだけ読んで見ても、長江の流れのシインは髣髴として眼前にあらはれて来るのを感じる。

文中の漢詩によって表現された「長江の流れのシイン」が目には浮かぶことを評しているのである。つまり、目の前にその光景が思い浮かぶような表現を評價している。「趣味の紀行文」の考えをつなぎ合わせれば、作者の感情が發露され、それが詩となり、その詩を読むことによって、作者が見た光景が眼前に現れるようなものが、理想の紀行文であるといえよう。そして、そこには『詩』の役割が外せないのである。

「秩父の山裾」においても、「鉢形城詩」へとつながる文章は「何とも言へない雄大なシインがそこに開けた」という書き出しではじまる。「秩父の山裾」でも、描寫を重んじて書かれたことが想像できる。そして「雄大なシイン」を讀者に届けるために「鉢形城詩」が大きな役割を負っていると考えられる。紀行文から「鉢形城詩」が獨立した「秩父の山に沿ひて」の「農夫が春の日を帯びて耕してゐるのも『詩』であれば、その小高いところに、その頃からの榎の大きな樹の一本残つて立つてゐるのも『詩』であつた。私は感慨無量たらざるを得なかつた。」も現在の城址の光景が作者の抒情をかき立て、詩を作るに至つたことを表現していると考えられる。

花袋が「光景が眼前に現れる」ような情景描寫を重んじていたことは、他の文章からもうかがえる。明治四十五年の「文章新語」<sup>(23)</sup>では、「『長い敘述よりは短い描寫』と私はいつもかう思つて、筆を執る。」という文や、「私は昔の和歌や俳句を讀んで見る度にいつもさう思ふが、理屈や思想や譬喩などを用ゐることを喜ぶものは拙い作者で、すぐれた作者になればなるほど、描寫したものが必ず多い」という文が見られ、描寫を重んじる態度や和歌や俳句などの「詩」に對しても同様の考えを持っていたことがわかる。

そして、「文章新語」には、「文字の選擇」についての考えも述べられている。「文字は遣ひ方如何に由つて、新しくもなれば舊くもなる。文字は作者の心持にしつくり合つた字を用ゐた時に於て、始めて光彩を放つて来る」とあり、また「今の人もすぐ飲込める言葉を以て言ひ顯はず方が讀者を動かすことも出来るし生々感じをも與へることが出来る」ともある。この文章は明らかに過去の傳統的な表現や言葉を意識している。傳統的な言葉よりも、今の作者や讀者が使い慣れた言葉を用いるべきであり、重要なことは今の「作者の心持」を表現できる文字であり、そうでなければ今の讀者の感情を動かすことはできないと述べる。花袋にとって、それが「作者の内部を發露」する「詩」においても通じていたであろうことは、想像に難くない。

花袋の「鉢形城詩」は音律の面から見ると、「漢詩」と言えるものではない。しかし、花袋自身は近體詩の規則を熟知していた上で、「鉢形城詩」を「漢詩」としていた。そこには、花袋の情景描寫を重んじる文章論と、傳統的な用字よりも今の作者や讀者が使い慣れた言葉を選択すべきであるという考えが背景にあり、そのため平仄に則つた用字ではなく、讀者が情景をイメージできる用字を行つたと推測できる。そのため、平仄は守られていなくても、古城の情景を髣髴させることができる「鉢形城詩」は花袋にとつて「漢詩」だったのでないだろうか。

なお、この問題を考える上で、考慮しなければならないことがある。それは花袋が「鉢形城詩」をどのように讀んでいたか、音でどのように表現していたかという點である。「鉢形城詩」は、發表された全ての場面において漢字二十字のみによつて詩が示されている。つまり、日本語としての讀み方が示されていないのである。しかし、生い立ちを考えれば、傳統的な訓讀によつて作詩され、讀んでいたと考えるのが妥當であろう。松浦友久『漢詩―美の在りか』<sup>24</sup>は、「訓讀漢詩」が「文語自由詩」として日本人の詩情や感性を育ててきたこと、それは讀詩においても作詩においても「訓讀」によつて日本人が漢詩を享受してきたことに起因する、と指摘する。松浦氏によれば、「文語自由詩としての訓讀漢詩」

は、「視覚的・観念的」に原詩としての定型を保ち、「聴覚的・音聲的」に和文詩歌としての自由律リズムを生むというポイントがある。「鉢形城詩」は、漢字二十字のみの表記により視覚的に定型を保ち、訓讀という自由律によって理解されることを想定しており、明らかにこの二重性によって成り立っている。

漢詩における「聴覚・音聲」という点でいえば、直讀と訓讀の問題も生じる。直讀でなければ原詩の音、つまり平仄や押韻などの音聲面で鑑賞することはできず、訓讀は音を出して讀んでいるものの日本語としての意味を感じるものにはすぎないという、音聲に對する二重性である。「鉢形城詩」は前述したように直讀の要素を欠いている。花袋自身は、傳統的な訓讀によって、唐詩をはじめとする漢詩を學び、作詩においても自らの詩の内容を訓讀によって把握していたはずである。訓讀によって學んだ唐詩を模倣するのに、近體詩の重要な要素である平仄、言い換えれば直讀を放棄することにより、「訓讀漢詩」の「視覚」と文語自由詩としての「聴覚」を手にしたと行うことができる。このように「訓讀漢詩」の觀點も、花袋が「鉢形城詩」を漢詩とする根本にあると考えられる。

### おわりに

ここまで田山花袋の「鉢形城詩」について、構成と形式の面から検討してきた。「鉢形城詩」は花袋の紀行文で三度も登場する詩であり、また、詩として紀行文から獨立して行われたという点から、花袋にとって思い入れの深い作品であることが考えられる。その構成は、幼い頃から漢文の素養を身につけていた花袋が「鉢形城詩」を作成するに当たって、中國古典詩に多く見られる對比の構造に基づいていたこと、つまり、自然と人工物との對比、そして、それを見る詩人の心情という構造を借りてきたものであった。しかし、花袋が依據していた中國古典詩、中でも近體詩は嚴密な格



律があるにもかかわらず、「鉢形城詩」はそれを守っていないかった。そこには、花袋の文章表現に對する考え方があるのではないか、そして、それが漢詩に對しても行われたのではないかと推測した。さらには、訓讀という日本人の漢詩の受容方法も原因していると考えた。

このようなことが、田山花袋個人で行われたのか、知識人全體の流れであったのか、多くの問題を残している。また、花袋の「鉢形城詩」の扱い方が變化していく様子などから、彼の漢詩に對する考え方の變化も推測できるところが、いまだ十分に調査し得ていない。

さて、最後に日本における漢詩史の視點から、田山花袋「鉢形城詩」のことに觸れておきたい。石川忠久氏は、明治以降の日本漢詩について「大勢としては滔々たる歐化の中で、漢詩文の素養は次第に衰え、日清戰爭以後、學校教育が普及するにつれ急速に下火になった。新聞から漢詩欄が消えたのが大正六年のことである」と、漢詩文が明治から大正にかけて衰退したことを述べるが、一方で牧角悦子「日本漢詩の特質 中國詩歌の受容と日本的抒情性について」<sup>(26)</sup>は、日本の漢詩を明治時代まで概観した後で、次のように結論づける。

日本人は、中國の文學形式の一つであつた漢詩というものを、初めは形式的に模倣し、やがてその表現形式を用いて自らの思いを自由に語るできるようになつた。

近代日本の中で漢詩は衰えたのではなく、心情表現の一つの方法として日本人に取り込まれていったとするのである。これは、先に擧げた松浦友久氏の「訓讀漢詩」が「文語自由詩」としての地位を占めていたことに通じる。これらのことを花袋の「鉢形城詩」に當てはめると、次のように言えるのではないだろうか。中國古典詩の世界を學び取っていく

中で、形式などを身につけた花袋は、内包化した表現の様式に倣って情景を描寫して、自らの思いをつづった。しかし、その過程で平仄などの音律的形式は省き、視覚的な定型性や描寫の様式を残して、「鉢形城詩」が生まれた、と。なお、この音律の面を省略化し、訓讀によって敘情性を強調した漢詩の味わい方は、現代の我々にまでつながると筆者は考えるが、それを述べるには、検討しなければならないことが数多く存在する。ここではそのことだけを指摘して、ひとまず小論の筆を擱きたい。

## 注

- (1) このときの戦いは、井伏鱒二により小説にされている。『武州鉢形城』（一九六三年、新潮社。もと一九六一年八月より一九六二年七月まで『新潮』に連載された。後に『井伏鱒二全集』第二十二卷（一九九七年、筑摩書房）所收）
- (2) 「花袋の漢詩①」（『田山花袋記念文學館研究紀要』第二十二號、二〇〇九年）、「花袋の漢詩②」（『田山花袋記念文學館研究紀要』第二十三號、二〇一〇年）、「花袋の漢詩③」（『田山花袋記念文學館研究紀要』第二十四號、二〇一一年）、「花袋の漢詩④」——花袋晩年の漢詩稿——（『田山花袋記念文學館研究紀要』第二十五號、二〇一二年）、「花袋の漢詩⑤」——漢詩に見る晩年の花袋——（『田山花袋記念文學館研究紀要』第二十六號、二〇一三年）、「花袋の漢詩⑥」——晩年の漢詩稿 初句索引——（『田山花袋記念文學館研究紀要』第二十七號、二〇一四年）。一連の研究は、年少期に雑誌投稿した漢詩から晩年に綴った稿本も含め、可能な限り花袋の漢詩を収集し作成年代順に整理したものである。
- (3) 前掲注（2）の他には、次の書が挙げられるにすぎない。柳田泉『田山花袋の文學』第二（春秋社、一九五八年）が、『穎才新誌』に投稿した漢詩から、少年時代の田山花袋を考察している。
- (4) 前掲注（2）参照。
- (5) 『近代日本文學』第七十集、二〇〇四年。後に『漢文脈の近代』（二〇〇五年、名古屋大學出版會）の第十一章に「作文する少年たち——『穎才新誌』創刊のころ——と改題し所收。
- (6) 慶應義塾大學藝文研究會『藝文研究』三十六號、一九七七年。
- (7) 『花袋研究學會會誌』第二十一號、二〇〇三年三月。

- (8) 『定本 花袋全集』別巻（臨川書店、一九九五年）所収。上記所収の宇田川明子・丸山幸子・宮内俊介「年譜」は、小林一郎「田山花袋研究 一年譜・索引」（櫻楓社、一九八四年）とその後の研究成果を参照にして作成されたもの。
- (9) 『旅』（一九一七年、博文館）所収。
- (10) 一九一八年（大正七年）、富田文陽堂。前掲注（2）「花袋の漢詩③」では、『趣味と紀行文』（一九一七年、アルス）を初出とし、詩題を「鉢形城址（懐古）」としているが、国立國會圖書館所蔵の『趣味と紀行文』では「鉢形城詩」が収められていることを確認することはできなかった。なお、『趣味と紀行文』は、花袋の筆によると思われる「紀行文の作り方」を巻頭に起き、その後、作例として島崎藤村や國木田獨歩など國內外の作家による紀行文を二十二編を掲載している。
- (11) 『山水處々』（一九二〇年四月、博文館）所収。『山水處々』は、二十一編の紀行文により構成されている。「秩父の山裾」は、二七六〜二八八頁に當たるが、そのうちの二八六〜二九五頁を、鉢形城を訪れた際の記述に割いている。また、後に「秩父の山裾」が獨立し『定本 花袋全集』十六卷（臨川書店、一九九四年）に所収。なお、「鉢形城詩」を説明する際に、多く「秩父の山裾」の文章が引かれるのは、『山行水行』や「秩父の山に沿ひて」が全集に收められていないこと、すなわち、「秩父の山裾」だけが全集に収録されているのが大きな要因であると思われる。
- (12) 『旅と紀行文』（一九二〇年、九月、博文館）所収。
- (13) 『中央公論』（一九二二年三月號）「詞歌」欄に組まれた特集。「現代藝術家餘技集」と田山花袋については小堀洋平「『中央公論』の「現代藝術家餘技集」にみる大正後期の田山花袋 ―和歌・漢詩と連載小説のあいだで―」（『花袋研究學會會報』第二九號、二〇一二年）を参照。
- (14) 『田山花袋記念文學館研究紀要』第二十五號、二〇一三年。
- (15) 市木武雄編『梅花無盡藏注釋』二卷（一九九三年、八木書店）。
- (16) 「子在川上曰、逝者如斯夫。不舍晝夜。」（『論語』子罕篇）
- (17) 一九〇六年（明治三十九年）、博文館。『定本 花袋全集』二十六卷（一九九五年、臨川書店）所収。引用した文章は「第參編 美文作法」の「三 漢文脈」にある。美文を作るために學ぶべき漢文・漢詩を列挙する。
- (18) 「二水」は、松浦友久「二水中分白鷺洲一詩材としての風土」（『高校の言語教育』一九七四年六月號、三省堂）。のちに大きく修正し『詩語の諸相 ―唐詩ノート―』（増訂版 一九九五年、研文出版）に所収）によれば、「一水」に改めるべきであるが、田山花袋が見たであろう『唐詩選』や『唐詩三百首』は「二水」に作っており、「二水」とした。

(19) 表現様式ばかりでなく、用字においても唐詩からの影響は推測できる。本稿では紙幅の都合で言及できないが、たとえば起句の「襟帶山河好」は、白居易「敘德書情四十韻上宣歙崔中丞詩」に「山河地襟帶、軍鎮國藩維」とあることなどが挙げられる。

(20) 『廣島大學大学院文學研究科論集』第七十九卷、二〇一九年。

(21) 「嚴島」は『子規全集』第八卷、漢詩・新體詩（講談社、一九七六年）の「咏稿 自明治十六年至同十八年」所收。五言拜律。

前半の六句で、毛利元就と陶晴賢との嚴島の戦いの様子が描かれ、後半の六句で戦いから時が過ぎて往時を忍ぶことが出来な  
いことを述べ、本文の二句で結ばれる。佐藤正光氏は「正岡子規の漢詩」（『廣島大學大学院文學研究科論集』第六十八卷、  
二〇〇八年）においてもこの詩を取り上げ、「言うまでもなく人事の儻さと自然の悠久とを對比的にとらえたものであるが、こ  
れは杜甫の「春望」詩に「通ずる思いである。當然のことながら、子規も杜甫の此の句を意識していたであろう。」と述べる。  
一九一七年、アルス。

(22) 『花袋文語』（博文館、一九一二年）所收。のちに『定本 花袋全集』第十五卷（臨川書店、一九九五年）所收。

(23) 岩波新書、二〇〇二年。第V章「文語自由詩」としての「訓讀漢詩」。

(24) 石川忠久編『漢詩鑑賞事典』（講談社學術文庫、二〇〇九年）附録の「日本の漢詩」。

(25) 二松學舎大學『日本漢文學研究』八卷、二〇一三年。

(26) 追記 本稿は、二〇一八年十二月に實施した、寄居町立寄居中學校第二學年を対象とした寄居町中高連携事業高等学校體験授  
業（國語）の内容をもとにしている。體験授業の實施に際しては、埼玉縣立寄居城北高等學校地歴公民科教諭高田雅樹氏に様々  
な面で貴重なご指摘を頂戴した。あらためてお禮を申し上げたい。